

明けましておめでとうございます。去年の暮れに 67 歳になりました、というよりなってしまう、いやだねえ、じじいだね。子供に頃、若い頃は「じいさん、ばあさん」と呼ぶのは 55 歳ぐらいの人、60 歳を超えると爺さんはバタバタ亡くなっていった、婆さんも 70 歳を超えると姿を見なくなった。昨今日本の平均寿命は世界一だとか、周りの婆ちゃんが亡くなった年を聞くと 100 歳に近い人が多い、爺ちゃんも 80 歳代後半の人が多く、オレもまだまだこれから 10 年 15 年と絵を描くぞ、創作活動を続けるぞとカラ元気の雄叫び「わわわ〜」

正月は娘一家がやってきて 6 人でんやわんやの宴会のはずが、腰痛と風邪ひきの初期症状、1 杯だけ飲んでベッドでダウン、1 日寝ていたら何とか治ったかな、雑煮を食って、河原を走って、一家を送っていった。みなさんが帰って一人で“天狗舞（お土産の酒）”と“大根の菜”酒が飲める幸せ、身体が元気な有難さ、衣食住よし、金よし、たくさんの賀状をいただいたので返信を書かなくては・・・。

小関智弘著<職人学>この二日間、腰痛と風邪のためダウン、布団の中で読んだ。

この先生は腕のいい旋盤工として長らく町工場働きながら“直木賞”“芥川賞”の候補にもなったという文筆家でもあるらしい。

ものを造るということは、単なる技術では通用しません。技術以前に作品の構想（イメージ）がなくては、何ものも創ることができないからです。つまり作ると創るの違いです。師匠あるいは先達について、料理の修業をする、師匠の作る料理を見て、次第にその調理を覚えて、やがて一人前になる。ただそれだけではもの真似にすぎません。ものを創るには、創るという心構えがなくてはならぬはず。昔職人魂といったのは、そのことを意味する・・・。

新弟子採用の折、親方がまず昆布と鰹節を使って、一番出汁（だし）と二番出汁をとり、塩と醤油で味をつけて、清汁（すまし）を作ってみせる。小僧さんにその真似をさせる。一度でパスなら有望な弟子、二度目に合格なら修行次第では人並みになれる、駄目な子らには方向転換を勧める。すぐれた素質を持つ子らが 10 年の間懸命に修行をすれば料理の仕方は覚えられるがそれは単なる技術を覚え身につけたに過ぎない。<数江瓢鮎子著>がまず載っている。

これからが先生の弁。

○誰の指先でも 1/100 ミリを感知できる。「お前の髪の毛と俺の髪の毛を 1 本ずつ抜いて、親指と人差し指で挟んで軽く振ってみろ、どっちが太いと思う」「自分のほうが太そう」と言いながら、マイクロメーターという測定器で測ると 1/100 ミリの差が出た。先生が見習工時代に先輩から言われた事だそうだ。人間の感性とはそれほどすごいものだ。

○メッキの液を舐める。大きなメーカーが「メッキがうまくいかない」と技術者やら大学の先生やらに調べてもらってもわからない処で、熟練工が呼ばれ、彼は液に指を突っ込んでペロリと舐め「液の配合が違う」とすぐに答えを出した。液を作る容器のラベル表記が誤っていたらしい。子供のころに聞いた話だが、百姓の爺ちゃんが「コエタンゴに指を入れて舐めとる」と聞いたことがある。土を舐める、鉄を舐める、皿を舐める、舐めることでいろいろなことが解決する、とたくさんの熟練工、名工、鉄人が登場する。

○日本では大量生産部品では不合格品を出すのは恥ずかしいことである。職人の腕がなくという。数をこなすよりも、まず先輩と同じ出来栄えのものを作ることを最優先する。初めは数を作るのに時間がかかるが不合格品は 1 個もでない、習熟するにつれて生産量が増加する。

○切れ味のいい刃物から出る音は一様に澄んだ音が出る。

○世界中の人が「指を怪我しない缶がほしい」に答えて、何年もかかって考え試作して成功した日本人がいる。下図版。

○金属の板を削る注文に「この部分を 1/10000 ミリ盛り上げて」これに答えられるそうだ。

さて、先生の話、熟練工の話面白く読んだ、素晴らしい、これはいいと感激した。我慢強よく貧しきおっさん、おねえさんたちだ。

「絵、アートはちょっと違うかな、オレとは違う、これはちがう」とも思った。その話はまた後日。

「明けましておめでとう」常套句の正月「めでたくもない正月」などと言えば「お前さんは勘ね者、天の邪鬼か」と揶揄されそうなので「おめでとう御座います」「本年もよろしく」と言っている、笑っている、挨拶をしているがそれこそ「何がめでたい」と小さい声で後ろを向い言ってはいないが、本当はそうしたい。

昔から新しい年というのは「今年も無事に迎えられた」「息災で事故もなく生きてこられた」「もう1年という区切りを突破できた」という“めでたさ”なのかもしれない、今のように何でもかんでも有り余る衣食住の環境の中に在って、治安もよし、病もなし、寝ぼけた人生、やっと新しい年を迎えられるという喜びがオレには無さ過ぎるのかもしれない、とボヤキがだんだん「オレに対する風当たり」になってくるのでこれぐらいで留めておこう。

今年は腰痛の「イテテ」の日々が何日かあり、その時に発見したのだけれども、腰痛は椅子に腰掛ける姿勢が一番良くない、10分20分と短い時間ながら腰掛けていると普段なら何でもなしだけれども、スイッと立てない、全体がぐらぐらする、思いきって立ってみると「いてて」なのである。正月の寒い季節、建て付けの悪い木造家屋の我がアトリエで椅子に腰かけ、それもだらしなく腰を前にずらして座っていたりすると、机に向かって何か作業をしていたりすると、スイッと立てない、全体がぐらぐらする、情けない状態の日々が続いた。立っているか寝転んでいるかが一番楽だ。朝起きて「今日こそ治っているかな」と起き上がって便所で小便をしているとやはり腰がグラグラ「まだ治っていないのか」「治らないのか」「何日かかるのか」湿布を貼った、電気毛布を当てて寝てみた、布団を余分に掛けて暖かくしてみた、いろいろ試みて10日程経った頃から痛みが無くなり、今日はバドミントンの練習日、ダメなら途中で帰ろう「できるか」「不安だ」と行ってみたが普段通りにできた、相変わらず下手だけれども身体は動いた、踏ん張れた、飛べた、さすがのこの寒さで汗もあまりかかなかつたけれど、今は風呂からあがって、燗酒を一杯ぐびりと飲んでご機嫌である。

50歳代、60歳代前半は正月といえば山に入っていた、雪山を登っていた、雪の中で寝ていた事等を思い出すが、一番好きな山、一番印象に残るのは“槍ヶ岳”5月のGWも含めると5,6回以上登っているかもしれない、それも新穂高温泉から入るコースがお気に入り、もう一つ上高地から入るコースもあるのだけれど、やはりこちらがいい。正月になると皆さん山にやってくる、1月1日にてっぺんに立ちたい、頂上でご来光を拝みたい、ということでこの前後の何日かは頂上小屋も営業している、小屋の人も秋に小屋を閉めて帰ってしまうが正月前になると、ラッセルに次ぐラッセルで小屋まで登って出入り口の庇屋根まで積もった雪を捨てる作業から始めるのかな、今頃は横に重機が置いてあるのかな、とにかく正月に頂上の小屋に泊まった事がないので詳しくは知らない。<調べてみると正式名称は槍ヶ岳山荘といい1月から5月まで休みとなっている、正月は営業していなかった、料金は晩飯・朝食・弁当まで含めると1万円也>5年ぐらい前澤山さんと行った。朝に大阪を車で出発、新穂高温泉の登山者用無料駐車場に車を止め、穂高平避難小屋で1泊、翌日は槍平小屋まで半日以上かけて行った。雪のない季節ならこの道は4時間もあればゆっくり着くのだが、小屋が営業していない季節は雪が積もり、左右から雪崩の危険があり、槍平小屋まで行き着いたらなんとか槍には登れそうというぐらいに行き着く確立の悪い道だそうだが、オレが正月に此処に行く時はいつも幸運にも、難なく槍平小屋まで行き着ける。この道は蒲田川の上流、右俣谷に沿って上流に歩く、雪のない季節なら1時間も歩くと穂高平避難小屋がありその横に牛を飼っている牧場がある。しばらく行くと小さい沢が合流する、そこが白出沢、白出小屋という無人の小屋がある。白出沢にも夏に奥穂高岳から降りてきた、その時は上高地に入り岳沢ヒュッテでテント泊、前穂高岳次は奥穂高岳そこで止まる予定が盆の季節で客がいっぱい、登山客が多すぎた「もう少し行きましょう」という声で今度はぐんぐん下り結局白出沢まで下ってきて、もう体力の限界だ「水の有る処でビバークをしましょう」と林道わきで休んだ。夏の其処は夜中に何人かが鈴を鳴らしながら歩いて行ったのをうつらうつらしながら聞いていたような気がする。次が“滝谷出会”ここに流れる沢は大きい沢、その傍に避難小屋が在りここでも二度くらい寝たことがある。その手前に地図には載っていないが蒲田富士に上るルートが在り、冬季、雪の季節に登ったことがある。半日ぐらいで槍平小屋に着く。ちょっと散歩にと奥丸山に登り翌日は何とか槍ヶ岳に登れたが、てっぺんは異常に寒い、風もきつい、写真を撮って早々に引き揚げた、と簡単に言うが、ガチガチに凍った雪の斜面、滑り落ちないようにアイゼンを喰い込ませ慎重に下った。楽しい思い出だ。図版は2年前の夏かな。

今日はやっと去年の暮れからの念願、比良山への道を歩いている、だってそうでしょう、槍ヶ岳を思い出して当ブログに書いたけれど話だけではつまらないもんね。とはいえ先日来の腰痛「いてて、山どころではない」というのがやっと収まり、バドミントンも多少身体をかばい気味ではあるが出来た、飛べた、動けたということで昨日の夜に行くぞと決め用意を始めた、日帰りだけジャッケの上下、靴、アイゼン、ピッケル、ライトとこまごましたものがたくさんある、持ち物検査表を出してあれが無いあれが足りないとチェックをしたはずだけれど、雪山で特に快晴の白銀の中でのサングラスを忘れた、快晴ではなかったので良かったが“雪目”になる翌日には目が開けられないぐらいに痛くなるらしい。行先はいつもの定点コース、北小松から登ろうと思った、このコースは気に入っている、だから登りが続き、途中から斜度がきつくなり、3本も歩くと弁当ポイントの釈迦岳か北比良峠に到着する。それからスキー場跡を通過して武奈ヶ岳、ブナの木が生えている処を通り抜けて金糞峠、比良駅と歩くわけです。とにかく長い時間がかかる、本日は雪なので「うまく行ければ北比良峠から下るショートカットコースかな」と前の晩から考えていた。なぜ北小松から登るのかというと、登山口まで歩いて15分ぐらいで行けるという事と、高槻から敦賀行の新快速が比良駅には止まらない、比良駅から登山口まで1時間弱もかかる、歩くだけで疲れてしまう、ここから登る人が少ないので混雑しない、などなどの理由で北小松がお気に入りなのです。

家族が6時台に起きて出雲方面に遊びに行くというのを聞いていたので「なんだかごそごそするな、まだ6時台だな」と夢うつつが「起きて1本早い電車に乗れば・・・」とバタバタ、パンを焼き、茶をテルモスに入れ、定番の野菜だけ弁当を作り、服を着替え、布団をたたみ、バタバタ「15分しかない、1本早いのに乗れなくてもいいや、間にいくつがあるかも・・・」と自転車を走らせた。前に近所の坂田歯医者先生「急いでいるからゴメン、お先」と走ったが駐輪場のエレベーターで一緒になった「山、いいねえ、今から博多に1泊で牡蛎を食べに行く」「おお、オレも日々に牡蛎を食いにいきたいねえ」話ながらホームに降りると丁度2分前だった。1時間前の電車に乗ればラッキー、天気予報では午後から曇るという。敦賀行新快速はそこそこ混んでいたけれど時間通りに北小松駅に着いた。駅に近づく頃に便意を催してきた、これはいい傾向「駅の便所を借りよう」最近酒量が減り、それまでは朝飯を食っている最中から腹がごろごろいだし、軟便気味の糞が難なく出していた、酒も1杯が2杯と杯を重ね3、4日でビンが空になるという“アルコール中毒ペース”ところが今はゆっくり1.2杯を「旨い」と可愛いペース、娘の方がオレと逆転現象「あまり飲むなよ」と考えられないセリフを吐いている。そんなこんなで便意のない日が在るようになった、気にもしてなかったが、昼間急に便意を催し困ることもなくなったと喜んでいただけだが、というのは昼間の急の便意で困った話、失敗した話は数多ある、この話を始めると失敗談、滑稽談と枚挙に暇がないのだけれど、その話は後日に。便秘で困っているという人の話はよく聞いていたけれど、本当にそれこそ他人事と聞き流していた、オレの場合はせいぜい1日のことだけれど、「二日目の排便がしんどい、なかなか出ない、頭の血管が切れそう」という事があってから無理をしないようにしているが、廃便は毎日あるのが身体にいい、快便がいい。それともう一つおかしな現象が便器の中が流れない、二日目の排便は量が多い、粘度が固い、形状が大きいというようなことで流れず、半日かかって何度も注水しごぼごぼと流れてくれた事がもう10回は超えるかな、排便様々である。8:56分定刻に到着、トイレで無事排便、改札を出て「着替えよう」ベンチに荷を置いた。靴を脱ぎジャッケのズボンを履く、靴の紐を締める、スパッツを着ける、上着は暑くなれば順次脱いでいこうと出発、歩きながら小便をするのを忘れたと気づいた。普通は大便をするときに小便も自然と出る？オレも昔はそうだったがそれが出ないので忘れてしまう、終わって歩き出して気付き、ええい次の1本までと進んだ。

雪の山へは1年ぶり、今回はクラシックな皮の登山靴を履いて行った、手持ちのプラスチックブーツが経年劣化で何時潰れる「山の中で割れたら大変ですよ、いつもペンチと針金を持ち歩いている」というような話を聞くに及んで、もうこれからは雪山では皮靴にしよう、いまさら3万円4万円の予算で新しい雪ブーツは考えられないし、もう大きな山には行くこともないだろうと思っている。今回はアイゼンを着けることもなくすいすい歩けた。

ええと今は3時、歩きだして6時間。1時ごろにご飯を食べたんかな。

釈迦岳のだいぶ手前で若者たちが、鍋を炊いて、ビールを飲んで大いに騒いでいました。若者といっても30歳代かなあ、珍しくもこんな季節に、こんな山に30歳代の若者がいて、半分ハイキング気分かもしれませんが、同年輩の爺婆ばかりの中で、大きな声、弾ける笑い、若者はいいねえ。ビールはロングカンでした。

3人組の彼らが作ってくれたラッセル跡をオレは利用して登ってきたんですが「あれ、ありがとうございます、ラッセルが在って楽でした、え、ここからないんですか」「僕らも、もう少し行こうと思ったんですが、散らかしてすみません、釈迦までと思ったんですが、もう始めようという事で宴会をやっています」「ここからはラッセルはありません、深い雪ですねえ、膝まで潜ってもう進めません」

ラッセルがない、踏み跡がない、釈迦はそこに見えるので遭難は心配せんが、時間がかかりそう、これはやばいな、でも釈迦まではいけるんじゃないかな、目標釈迦で進もう、という事で歩き出した。

膝までズボット入るラッセル、ラッセル、これはしんどい、なかなか行き着きません、一步一步潜ります、所々で踝ぐらいまでしか潜らないところがあって、そこは下が固くすいすい登れるが、ズボズボのところはホントに辛い。膝よりもう少し入ってしまうと抜け出すのに大変、それこそ足の根元まで潜ってしまったら、どっこいしょの、こらしょ、ピッケルを寝かし、突き刺し雪の上でばたばたもんね、うわわ、これは大変、大変、大分歩いたがそこに見えるピークが、そうかと思ったが釈迦がまだまだ次のピークと遠い、これは無理か、今日は無理か、とにかく飯にしよう、まずはリュックからダウンを出して着た、曇りだし気温も下がってきた、琵琶湖が見える、麓の街並みと田圃が見える、うっすらと雪に覆われている、手作り弁当を食った、テルモスの茶を飲んだ。今日はこれまでにしようと思った。ギューギュー詰めの御飯と野菜だけ炒め、いつもの定番ですが、今日はちと御飯が多かったか、後々胃が重い、ご飯を食べ、写真を写し、琵琶湖の景色を眺めていましたら、天気予法通りに曇り出し、小雪のようなもので舞い散り、とてもじゃないけどこれはアカン、今日はこれまで、と戻り始めたら、前後から人が来た。後ろから下ってきた人はスイスイ歩いています、アレレと見ますと、どうなってるのかなと見ますと、ワカンを着けて歩いておられます。「こういう道はワカンですよ、金糞から来たよ、雪はワカンだよ」オレはワカンの経験がない、昔、阪口さんからもらったがに捨ててしまった、「こんな雪はズボ足は無理か、ワカンか」としみじみ見送った、それこそスイスイ下って行った。歳もそう変わらない人のように、へええとあっけにとられて見送った。

下から登ってきた人は多分同じ電車、登山口で靴を履着換えていた何人かの人の一人のよう、「行けるかしら、駄目かしらと歩いてきました、もうちょっと行ってきます、仲間も来ます」と言っておられた、オレは後ろ髪を引かれながらも下山したが、足の遅いあの人たち、大丈夫かなと心配もした、下に降りるころには真っ暗だ、では辛いものね。今はだいぶ下って来て、もう1本で登山口に帰り着く、というところで休憩中、陽がまた出てきて、ホンワカ暖かい、白い雪の上に、葉が落ちた木々の影が朧に見える。3時過ぎというのに雪の中、暖かい、向こうに枯れ木があります、下の方は直径1メートルぐらい、上の方は枯れて腐りかけて虫が食っているのか哀れな姿だけれど、周りに気がないところを見ると、君臨してたんだ、堂々と立ってたんだ、その木は。そこに鳥がたくさん集っています、鳥はスズメぐらいの大きさ、それより少し大きいもの、色がいっぱい入っている、オレンジ色、茶色、黒色、青色の入ったもの、鳥の名前は知らないけれど、いっぱいいますねえ、チュッチュ何かを食っている、嘴を拭っている、オレの想像では、木の中の虫を啄んでいるよう。

少し歩くと真っ白い雪の上、インクを巻き散らしたような紺色、藍色のインクをポツポツ撒いたような跡がある、「あれえなんだろう」と朝に見ていたが、帰りの今も同じようにインクの浸みが、白い雪の上にポツポツ撒かれている。そばの小さい灌木に、3ミリぐらいの黒い実が付いている、その身を一粒取って潰してみると青い汁が出た、雪の上に置くと、藍色が広がった、今落としたものは藍色に紫色が入って色も鮮やか、朝から落ちていたんだと思えるもの、時間がたった浸みは藍色といってもやや黒ずんでいる、これは何の実だろうね、インクには使えないねえ、染料にも使えないねえ、舐めてみたら、甘くも辛くもない、味がしない。

録音にブツブツ喋るのは、人のいない処で無いと・・・がはは。電車は4:24分発に乗れた。もう夕方だった。

松本道介先生、著書の中で、書齋に積まれた山のような本を全部捨ててしまいたいという願いを持ったので、本の整理を初めてつい拾い読みをしてしまい整理など一向にはかどらない、その最中に見つけたのが・・・に続くけれど脱線。

“断捨離”という言葉が流行っている、と調べた。

断行：入ってくる要らないものを断つ。

捨行：家にあり要らないものを捨てる。

離行：物への執着から離れる。

ヨガの行法らしい。単なる捨てるという事ではなく奥深い意味があるようだ。

先生の場合は捨てるのが目的で、ゴミ箱に入れるのを躊躇しているうちに、ゴミのはずが宝物に代わってしまったというよくある話、主婦が納戸を整理しよう、要らないものを捨ててしまおうと納戸に籠り、昔懐かしい写真の束を見つけ涙ながらに何時間かを過ごした話と似ている、このスカッとしない処、くどくど言い訳をしながらも、弱弱しく語りながらも、毒の籠った気炎を吐く先生の言葉が好きなのだ。感心するのは紙袋一つが全財産のホームレスのおっさん、わが町でときどき見かけるが、彼こそ生き方が“断捨離”そのものと思っている。

先生がそんな作業で見つけた本が“パパラギ”オレも機会があれば読んでみたい。1世紀前にサモアの酋長が初めてヨーロッパ旅行をした、パパラギとはヨーロッパ人の事でその旅行で驚いた事、感心した事を、酋長の旅行体験談という形で述べられている話らしい。

このような話、日本の戦国時代にヨーロッパから来た使者、日本から使節団としてヨーロッパに行った少年使節団、現在でもカメラを担いだ文明人がアマゾン流域の鎖国をしている民族を訪ねたり、エスキモー人がニューヨークに行ったりと様々なことが思い浮かぶけれど、パパラギの表現が面白い。「この種族は（ヨーロッパ人の事）幾重もの布で身体を包み、頑丈な石の箱で暮らしている。金と称する丸い金属、重い紙を愛している。彼らは1日でも金がなければ生きていけない」話はどんどん続くが、サモアの人とヨーロッパ人とどちらが自然なのか、松本先生はもちろん酋長が自然で、文化文明を謳歌している、発展発達しているヨーロッパ人が本当は不自然、どんどん不自然になって行っているのではないかという。第一次世界大戦で全ヨーロッパの戦死者が800万人だとか、そしてすぐに第二次世界大戦になり、第三次が起りかけ、未だにどこかでドンパチが行われている、どんどん殺戮のための兵器がより上等になり、どんどんより絶望的になって行く、政治家も科学者もジャーナリストも無力感が漂う。

これを読みながらふと思ったのは原発の事、原子力発電の事だ。未だにそれでも電力生産は原子量だという日本国政府、いやいや脱原発だというおっさん。大事なものは「原子力発電所を、核設備を、解体・整理・後始末をする技術その5W1Hをもっと頑張らんとアカンのん、ちゃうのん」というオレの意見。

先日木地師の話を読んだ、木地師は日本全国の山の上の木を自由に伐採する権利があり、それらを材料にして、生活食器であるお盆やお椀を轆轤技術で作って生計を立てていた。10年20年経つと材料の材木が枯渇して、新天地を求めて移動したらしい、自由な山の民だ。同じように“サンカ”という人たちがいて、季節ごとに移動して山の麓や川の傍にテントを張って生活していたらしい、蓑（みの）や箆（ざる）等の竹細工を作り、農作業の手伝いをし、川魚を取って暮らしていたらしい。「農耕せず」「定住せず」「服従せず」「無籍の人」としてつい最近まで生きてきたらしい。未開の国の土人として、自然を相手に暮らす、山の民として、放浪の歌人として、自然を相手に暮らす、衣食住は最低限、乞食をする、援助をもらう、こういう人を文献で見つけた。こういう人たちの“捨てる”という生き方の真似はできないけれど、興味は持つけれど、ただ感心するだけ。

「拓本とったことある？」中西プロからの問い合わせ「ないけど・・・」から始まり、幾人かの友人に問い合わせ材料や技法を聞いた。「簡単だよ」「難しいことはない」というのが皆さんの意見「それなら一度試してみるか」という事で、墨とタンポンを注文、蘇山先生に画仙紙を戴いた。

「オレの車、普通タイヤ、乗せて、そこまで、自転車で行く」「任せて、スタッドレス、履いてる」天気予報でこの2.3日、寒気が日本列島に入り雪の地方は大雪、茨木の山間部にも雪が舞い散るかも、道路が凍結するかも、怖がりのオレは乗せて行ってもらってラッキーと思ったが、現場は軽自動車でも何度か切り返すような急坂をぐるぐる登る処、正解だったと胸なでおろす。

171号線の平和堂付近で中西プロと落ち合い、千題寺に向かい、目的地のお宮さんに着いた。

千題寺は我が住まいから北に向かってほぼ10キロの山間部の村だけれど“隠れキリシタンの里”として有名な処だろう。フランシスコザビエルが日本にキリスト教を布教にきたのが1549年、長崎からあつという間にいろいろな処に広がったらしい、40年足らずで秀吉の“バテレン追放”徳川幕府の“禁教令”キリスト教の神を信じる人、神に祈る人、その人たちはキリスト教を信じている事を隠し、キリストの神に祈る事を密かに行った、そういう隠れキリシタンが平戸や五島列島を始め、いくつかの場所にあるらしいが、身近な茨木にも在ったらしい。千題寺は現在は茨木市だが、当時は高槻領主だった高山右近(1615没)の所領地だったらしい、クリスチャンだった高山右近の影響で同じようにたくさんの人がクリスチャンになったなかで千題寺にいた何人かがそのままクリスチャンとして禁教令以降も留まった。今でこそ車でスイッと行ける場所だけれど戸数も5.6軒と少ない、道もないというような山間部で密かに隠れキリシタンが存在していたらしい。それこそガラパゴス的な発展を遂げたか、最初の布教のそのまま純粹だけど融通の利かない信仰が100年200年300年と永々と続いたと思うがその年月はずごい。しかもそれこそ永々と隠れて密かにだ。それこそ近隣にはこのお宮さんが在りお寺もおそらく近所に在ったはずというような環境の中でという事だ。ただこの村で発見されたフランシスコザビエル画像は神戸市立博物館にあるが一級品らしい。

この村は現在大改造の真っ最中、村のあちらこちらに大型土木機械が入り、木を切り倒し、山を削り、道を付けている。というのは村の中に第二名神の茨木インターチェンジができる、あと5年で高速道路が稼働する、何かの遺跡が発見されたというので発掘のため少し工事が遅れたらしいが、大改造、大発展の真っ最中、とはいえオレの嫌いな変化、大変化の真っ最中だ。何百年も続いた過疎の数戸の村が大変化するのだ。そんな村の細い道を登りきった処に、新築された祠がある、真新しい白木の柱・梁、真っ白い漆喰壁、銀色に黒光する瓦、軒先の瓦はまだ茶色い銅版で葺かれている、まだというのは、あと何年かすれば茶色い銅版に緑青が吹き緑色に変わっていくだろう。基礎の石は昔の物、同じような祠が元々在った処に新築祠を乗せたようだ、奥を覗くとご神体も古い石の上に鎮座している。隠れキリシタンの里とはいえ、日本人の誰もがそうであるように、神教、仏教、キリスト教、そして八百万の神々、みんなどれも好きなのだ、愛でているのだ。お宮さんは全てが左右対称に揃っている、と気付いたのが狛犬の事、牛の置物、灯籠、そして社そのもの、手を洗う水場、石畳の通路はそうでもないようだが。

「これと これと これ」と指差され「字が読めないね」と石の台座にスプレーで水をかけ“たわし”で擦ってみると、「あ あ あ これは字かな」何か所か字が浮き上がってきた。“嘉永”“安政”“慶應”と読める、調べると江戸末期の時代だ。続いて、人の名前が浮かび上がった。“〇〇”「おお村の人だ、何代か前のその家の人だ」“〇〇”「それも村の人だ、その名前がある」側で見ていた大工さんが嬉しそうに騒ぐ。大工さんはお宮さんの祠を新築した棟梁だ。“願主”“納”“立之”“建之”などの字も見え出すと全てが分かってくる。「慶應六年 願主 〇〇金蔵 四月立之」これが読めたらその対称の石にも同じ文字で姓名だけが違っている、狛犬も、牛も、灯籠もひとつひとつ判らない字が在ったがほぼ解明できた、ただ摩耗の激しい石の字は“月”という字しか判らなかつた。拓本は教えられた通りに進めたが風で紙が付かない、乾くと剥がれだす、湿ったままだと凹面まで汚れてしまうと結果は散々、うまく取れなかつた、ごめん。

図版は、戴いた紙の端切れでイタズラガキを試みた。

「システム工学」なんだか昔から聞いたことのある言葉のようだけれど、おおよそなんとなく想像はつくけれど、それが体系的に学問的に「何」とは解らない。日本の宇宙探査機“はやぶさ”が遙か彼方に在る小さい星というか岩石というか“イトカワ”と名付けられたその星まで行き、その星の表面に着陸し、その星の土なり石なりを“宝箱”に詰め込んで、地球に持ち帰ってくるという快挙を成し遂げた。その“はやぶさ”が何年も宇宙に居るうちに、一時は迷子になり連絡が長い間途絶えもうだめかというようなニュースも流れたが、長い航路の末にやっと帰って来るといので日本中が沸き返り、無事オーストラリアの大地に着陸した。宝物の入った箱も無事に回収した。帰って来た宝箱を開けてみると“イトカワ”という星の土や石の一部を確かに持って帰って来たといので再び湧き上がった。

“はやぶさ”の話を紹介した素人向けの本を読んだ。宇宙の中の小さい星とも岩石とも解らないような処まで行く、その星に着陸する、着陸して星のサンプルを取ってくる、地球に戻ってくる、という事を“はやぶさ”という衛星にさせるためにどうしたらいいとたくさんの事を考える、思案する、工夫する、これが「システム工学」という事なのかその一部なのか違うのかまたまた解らないが、話しを進めます。衛星はやぶさをロケットに乗せて発射する、まずはうまく飛んでくれ、ロケットがうまく飛んだら宇宙に到着、パタパタと太陽電池の翼を広げ発電開始、次はどこに行く目的地“イトカワ”は何処だ、スピードがうまく出せるのか、方向が間違っていないのか、なにしろ進む時間が年単位、何年間も回り続けても止まらないエンジン、光の波がはやぶさから地球の基地に到達するのに10分20分もかかるような遠い処と交信できる通信手段、「あっちだこっちだ」と指令しただけで制御可能な運転技術、間違ったり故障したりした時に修理する能力、目的の物を写すためにカメラの方向を決める、カメラのシャッターを切り、その画像を送ってくる、考えただけで、想像するだけで「えらいやつだ、すごい能力だ」オレの灰色の脳も感心する。

同窓の佃君と一杯飲んだ帰りの電車での話。彼は永らく台湾で働いていた。日産自動車の窓ガラスを作る台湾ガラス工場が職場らしい。前にも彼からガラス屋さんの話を聞いたかもしれないが忘れていた、そして即座に永い間疑問に思っていた事が、「なんでだろう」と不思議に思っていた事が口を衝いて出た。「軍隊の車の窓ガラス、ジープでもトラックでもガラスは全部平面、なんで曲面じゃない、あれなんで？」いまどきほとんどの車には曲面のガラスが嵌っている、いわゆるフロントガラスはふんわり丸く曲がっている、と聞きながら想像していたことは“平面ガラスはデザイン的に格好がいい、軍用車らしい無骨さが出せる”“最近流行のステルス戦闘機の平面デザイン、あれの車版なのか”“単なる軍隊の伝統、軍用車は100年前からあのガラスと決まっているのだ”勝手放題に想像していたが、佃先生「あれはやね、防弾ガラスなんだ」「ガラスを3枚とか5枚合わせている、普通の車なら3枚で小銃の弾ぐらいいは防げる、5枚なら機関銃でも大丈夫というわけ」「防弾ガラスでも最近は何とか曲面が出せるようになった、だんだん曲面を合わせる技術が出てきたが、まだまだ難しい」それを聞いて納得「なんだ、防弾ガラスだったのか、単純なことだったんだ」オレの質問に答えてくれた後に、彼は技術者の顔になっていろいろ教えてくれた。「日本のガラスは性能がいいんだ、あらゆる面でダントツなんだ、技術が満載なんだ」と小さい声で淡々と話すが「おいらの技術はすごいんだ」と叫んでいるようで心地いい。

システム工学とは話が違ってもいいかもしれないが、技術が在り、その高い技術に裏打ちされて、品質のいい製品ができるとか、宇宙の目にも見えない彼方にどんどん進んでいける、こういう話も聞いていて楽しい。文化文明が人類を滅ぼす、発展発達とはなんだという事を考える、という意見は好きだ、その通りだと思っているが、技術の話、工夫の話、ひらめきの話も感激する。

ガラスといわれても思いつくのは建物の窓、車の窓、TVに電球ばかりじゃなくて、美術工芸の分野、正倉院のガラス食器・ガレ工房の工芸品やら食器やら、スタンドグラスのデザインもしたことがある。過去に見たそれらの美術品作品の幾つかが思い浮かぶ。

図版はアトリエ定点。